

タイトル	中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究への展望
著者	呉，嘉琦；G0
引用	年報新人文文学(15)：158-191
発行日	2018-12-25

中国人日本語教師を対象とする ビリーフ研究への展望

呉 嘉琦

キーワード…中国人日本語教師、ビリーフ、先行研究、課題点、展望

一．はじめに

日本語教育の発展とともに、毎年日本語学習者数が増えている。それと同時に、教育現場では、教育内容、教授法、言語教育政策にだけでなく、学習者及び日本語教師の行動、考え方を左右する意識の面にも、いろいろな問題が出てきている。その中で、学習者と教師の行動、考え方をコントロールする意識を把握し、分析することが、日本語教育の現状を改善する一つの方法として注目されるようになった。そこで、一九九〇年代から日本語教育において、意識と関わるビリーフに関する研究が徐々に広まってきた。

言語教育では、Horwitz（一九八七）によるBALLI⁽¹⁾ 質問紙を用いて、言語学習者のビリーフへの調査から始まり、ビリーフ研究が広がってきた。ビリーフとは、物事に対する信仰、確信というものであるが、言語教育上のビリーフは、日本語教育学会（二〇〇五・八〇七―八〇八）により、「言語の学習方法・効果などについて自覚的または無自覚的に持っている信念や確信」と定義されているものである。日本語教育では、最初ビリーフの研究対象は日本語学習者に集中しており、日本語教師を対象とするビリーフ研究は日本語学習者より相対的に遅れていたが、近年、日本語教師の研修、日本語教師間の協働などが重視されてきたことと、研究方法の多様化により、日本語教師を対象とするビリーフ研究は増えてきた。

筆者はCINII (<https://ci.nii.ac.jp>) と日本語研究・日本語教育文献データベース (<https://bibdb.ninjal.ac.jp/bunken/data/>) を使用し、関連論文を検索した。その結果、二〇〇一年から二〇一七年までの、日本での日本語教師を対象とするビリーフに関する論文四二本を入手した。それらの論文について研究対象の観点から見ると、日本人の日本語教師をはじめ、中国人教師、韓国人教師及びタイ人教師などがある。また、中国の論文検索では、CNKI (<http://www.cnki.net>) を用い、検索を行なった。その結果、日本語教師を対象とするビリーフについての研究論文数（主な研究対象は中国人日本語教師）はわずか八本であった。中国での日本語教師ビリーフの研究は、最も早いもので李曉博（二〇〇八）の日本人日本語教師の実践知識へのナラティブ⁽²⁾ 研究と言える。その後、二〇一一年に、尹松（二〇一一年a、二〇一一年b）における中国人日本語教師の研究意識についての調査を始め、徐々に増えてきた。日本と中国双方での研究を合わせ、合計五〇本を入手した。日本における主な研究課題は、ビリーフの比較研究、教師観、授業意識及びビリーフの変容である。一方、中国における主な研究課題についての分析は後に詳しく述べる。

これまでの研究を俯瞰すると、日本語教師を対象としたビリーフ研究は未だ研究の可能性があると思われる。そのため、本論の目的は入手した論文に沿って、日本語教師を対象としたビリーフ研究の総括を試みて、これから中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究への展望を行なってみるのである。

研究方法としては、日本側の研究と中国側の研究を概観し、研究目的、研究対象及び研究方法を整理する。その上で、中国人日本語教師を対象とする研究を抽出し、課題点を見出し、これからへの展望を行う。本論の成果により、中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究の将来の発展に提言し、中国の日本語教育現状への改善に役立つことができると期待している。

二・一 日本語教師を対象とするビリーフ研究の概要

日本語教師のビリーフへの研究における目的及び対象は、日本での研究と中国での研究に分けて、時間順に沿って概要を論じる。また、中国人日本語教師を対象とした研究を抽出して、日本の研究と中国の研究を比較しながら、特徴を分析してみる。

二・一 日本における研究

日本での日本語教師のビリーフに関する、入手した42本の研究の目的及び対象を論文数により、二〇〇一年～二〇〇五年、二〇〇六年～二〇一〇年、二〇一一年～二〇一七年という三つの時期に分けている。二〇〇一

表一 日本語教師を対象とするビリーフ研究（日本）

2001年～2005年 (発展初期)	2006年～2010年 (安定発展期)	2011年～2017年 (急速増加期)
岡崎智己 (2001) 安龍洙・渡辺文夫・内藤哲雄 (2004) 李曉博 (2004) 冷麗敏 (2005) 松田真希子 (2005) 小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由 香里 (2005)	呉禧受 (2006) 久保田美子 (2006) ツィガルニツカヤ・レナ (2007) 古別府ひづる (2008) 古別府ひづる (2009) 小澤伊久美・丸山千歌 (2009) 嶽肩志江・坪根由香里・小澤伊 久美 (2009) 中井雅也 (2009) 岡本和恵 (2010) 飯野令子 (2010) 八若壽美子・藤原智栄美 (2010)	長坂水晶・木田真理 (2011) 西野藍・太原ゆか・内田陽子 (2011) 片桐準二・Kanokwan Laohabu- ranakit KATAGIRI・池谷清美・ 中山英治 (2011) 片桐準二・池谷清美・カノック ワン・ラオハブラナキット・片桐 (2012) 八田直美・小澤伊久美・嶽肩志江・ 坪根由香里 (2012) 小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由 香里・八田直美 (2012) 嶽肩志江・坪根由香里・小澤伊 久美・八田直美 (2012) 古別府ひづる (2013) 牛窪隆太 (2013) 秋田美帆 (2013) 小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由 香里 (2013) 坪根由香里・小澤伊久美・八田 直美 (2013) 坪根由香里・小澤伊久美・嶽肩 志江 (2014) 葛茜 (2014) 山田智久 (2014) 阿部新 (2014) 星摩美 (2014)・(2016) 福永達士 (2015) 布施悠子 (2015) 大河内瞳 (2015) 坪根由香里・嶽肩志江・小澤伊 久美・八田直美 (2015) 坪根由香里・小澤伊久美・嶽肩 志江・八田直美 (2016) 久保田美子 (2017) 八田直美・小澤伊久美・坪根由 香里・嶽肩志江 (2017)
6本	11本	25本

年～二〇〇五年を發展初期、二〇〇六年～二〇一〇年を安定發展期、二〇一一年～二〇一七年を急速増加期とした。論文の年代別の一覽表は表1に示す。以下の概要に使う用語は全てその論文から直接引用したものである。

二・一・一 二〇〇一年～二〇〇五年における研究

二〇〇一年～二〇〇五年（發展初期）では、論文数は他の二つの段階と比べてそれほど多くはない。まずは、岡崎智己（二〇〇二）では、日本人の日本語教師及び中国の大学にいる中国人の日本語教師と中国人の学習者の、日本語学習を含む言語学習に対する意識や考え方を把握するのが目的で、日本における日本語教育機関に務めている日本人教師一三五名、中国の各地域の大学に在職している中国人教師一一六名、及び中国の大学にいる日本語学習者五九四人を対象に、ピリーフ調査を行なった。

それに次いで、安龍洙他（二〇〇四）、李（二〇〇四）では、日本語教師の授業観及び専門知識を調査している。前者は韓国人学習者と日本人日本語教師の授業観の共通点及び相違点について考察するために、成績上位、下位の学習者それぞれ二名、日本人日本語教師二名（新人教師一名と経験教師一名）を対象に調査した。その中に、学生と教師の授業観の比較だけでなく、新人教師と経験教師及び成績上位、下位学生の比較も行なわれた。また、李（二〇〇四）では、日本人の日本語教師の専門知識を調べるため、日本の大学に務めている日本語教師でもあり、大学院生でもある日本人のRさん一名を対象に、授業観察して調査を行なった。

そして、冷麗敏（二〇〇五）では、中国の大学にいる学生と中国人日本語教師の授業に対する意識調査で、二つの問題を解明している。その一つはどんな教室活動があるか、いい教師像は何なのか、教科書に対する評価はどうなっているかであり、もう一つは、教師と学生の認識の異同点を明らかにすることにより、今後日

本語教育上の問題を解決する手がかりを提案するのである。この研究では、中国人日本語教師二九名、学習者二一四名を対象とした。また、松田真希子（二〇〇五）では、二〇〇〇年の文化庁による日本語教師養成ガイドラインの施行以来、その影響を受けたとみられる無経験、新米教師及び中堅と熟練教師の日本語教育観についての整合を試みた。調査対象は、日本人の日本語教師二七名で、無経験七名、新米八名、中堅八名、熟練四名である。小澤伊久美他（二〇〇五）では、教授活動に関する実践知識を用いた日本人の日本語教師の思考を解明するのが目的である。調査対象は、国内の日本語学校の新人教師一〇名とベテラン教師一〇名である。

この時期の研究目的から見ると、教師の教授活動に対するビリーフ調査は多いと言える。ここで取り上げた論文は対象の種類が多いが、ほとんどの研究中心に位置しているのは教授活動への調査、教授活動をうまく進行するための専門知識への認識に関する調査、また、言語教育政策の変遷が日本語教師のビリーフに与える影響に関する調査である。このように日本語教師のビリーフへの研究の発展初期では、主な研究課題は日本語教育における教授活動と関わっており、それに基づき、いくつかの教授活動に活かせる研究も行なわれたことがわかった。これは、当時、日本語教育が広められ、教育現場で起こっている問題を解決するため、単純に教授法を検討するのではなく、もう一歩踏み込んだ形が見られる。それは教授活動と関わる教師のビリーフが当時の社会的背景とは切り離せないという考え方によるものであろう。

一方、研究対象の分類については、国別による分類もあれば、教育経験の長さによる分類もある。対象数は数十人から百人以上超えている場合がある。また一部は、安他（同上）、李（同上）のような、少ない対象者を取り上げた研究もある。特に李（同上）では、一人の日本人教師を対象にして、深く追求し、調査する論文はそれ以後の日本語教師のビリーフ研究の中でも珍しいと言えるだろう。また、ネイティブ日本語教師（以下NT）

とノンネイティブ日本語教師(以下NNT)を対象とするビリーフ研究は、以後の異なる国の日本語教師のビリーフ研究に影響を与えていると考えられる。その他には学習者と一緒に取り上げた比較研究もある。それは学習者・教師はそれぞれ異なる背景を持っているため、双方を比較しながら、ビリーフ研究を行うのは、実際のそれぞれ異なる教育現場ではうまく活用できると思われる。

この時期の研究方法では、岡崎(同上)、冷(同上)は量的調査で、それ以外の論文は質的調査を使用している。岡崎(同上)では、「日本語の使用環境」に関する内容を含む改訂版のBALLI調査票を使用した。冷(同)では、「総合日本語」という授業へのアンケートを学生版と教師版に分けて作成し、実施した。一方、安他(同)、李(同)、松田(同)と小澤他(同)では、質的調査が使用されたが、具体的な調査方法はそれぞれ違っている。安他(同)ではPAC分析⁽³⁾を使用している。李(同)における研究方法是ナラティブであり、松田(同)では、日本語教師が「どのようなことに困難を感じ、どのような教師像を理想とし、どのような現状認識のもとに、どのように成長していきたいと考えているか」に関わる一〇項目からなる質問紙を用いた。小澤他(同)では、調査対象者を授業観察させて、授業観察のプロトコル及び授業後のレポートをデータにして分析している。この時期の論文数において、多く使われた研究方法は質的調査法であった。量的調査法を使った論文もあるが、量的調査は人の意識を深く探求できないなどのような限界もあり、インタビュー、参与観察などの方法を用いた質的調査が日本語教師のビリーフ研究を深く進めてきた。

二・二一・二二〇〇六年～二〇一〇年における研究

二〇〇六年～二〇一〇年(安定発展期)では、量的調査法を使用した論文には呉禮受(二〇〇六)、久保田美

子(二〇〇六)、ツイガルニツカヤ・レナ(二〇〇七)、古別府ひづる(二〇〇九)及び中井雅也(二〇〇九)がある。これらの研究の対象はほとんどノンネイティブ日本語教師であるが、呉(同)では韓国人教師と日本人教師のビリーフを調べ、両者の比較への研究を行っている。また、ツイガルニツカヤ(同)では、日本語教師と学習者のビリーフへの比較研究であるが、日本語教師はNTとNNTを含んでいる。主な目的は、日本語教師のビリーフを、特徴、授業姿勢、行動特性及びいい教師像といった面から探ってきた。

これらの研究は量的調査を使用した⁴が、具体的には調査の仕方が若干違っているところがある。呉(同)では最初に提案したBALLI調査票に基づき、五九項目からなる改訂版BALLI調査票を作成した。それを使用して韓国にいる日本人の教師二五名、韓国人の教師二七名を対象にして調査した。久保田(同)では、NNTのビリーフを調査するため、教師研究にきたNNT四一五名を対象にして、BALLI質問紙を使って調査した。その結果をさらに因子分析⁴を行なった。ツイガルニツカヤ(同)では、オノマトペに対する意識を調査するため、オノマトペに関する質問紙を作成し、日本語教師一四〇名、学習者一二〇名を対象に実施した。その結果は統計分析を使用して平均値及び有意差を調べた。一方、古別府(同)では、タイの高校での日本語教師の行動特性を調査するため、タイで働いている日本語教師(日本人一五名、タイ人一〇六名)に対し、日本語教師の行動特性と関わる四一項目からなる質問紙を使用し、調査した。その後、因子分析も行なった。中井(同)においては、タイの高校で求められる日本語教師像を調査するため、タイ人の教師一〇五名、学習者六四八名に対して質問紙調査を行った。本調査に入る前に、予備調査を行ない、質問紙を作成した。また、本調査のデータを使用し、さらに因子分析を行なった。

この時期で質的調査法を使用したのは、古別府(二〇〇八)、小澤他(二〇〇九)、嶽肩志江他(二〇〇九)、

岡本和恵(二〇一〇)及び飯野令子(二〇一〇)、八若壽美子他(二〇一〇)である。そのうち、古別府(同)、小澤他(同)、八若他(同)では、PAC分析を使用した⁴⁾が、古別府(同)はタイ中等教育機関でのタイ人日本語教師女性二名を対象に、ビリーフ調査を行い、その上で、日本語教育経験の差による違いの比較も行なった。小澤他(同)は異なる統計ソフトによりPAC分析に与える影響を調べた。この研究では日本人の日本語教師、女性一名を対象にPAC分析を行ない、異なる統計ソフトを使用して分析した。八若他(同)では、外国人日本語教師シンガポール人二名、タイ人一名、台湾人二名を対象にして、彼の対日イメージの共通点について調査した。嶽肩他(同)においては、新人教師と経験教師のビリーフを比較し、及びそのビリーフの背後にある思考を分析するため、新人教師、経験教師各一〇名を対象に、プロトデータを採取し、感想レポートを記述させ、最後にビリーフへの質問紙調査を行なった。岡本(同)では、中国人日本語教師、女性一名を対象にして、ビリーフを調査した。調査方法はExploratory Practice(探求的実践)だけでなく、授業へのフィードバックとインタビューも行なった。飯野(同)では質的調査のライフストーリー⁵⁾法を使用して、NNTの意識していなかった経験の新たな意味生成の過程を考察している。

安定発展期においては、主な調査対象はNNTであり、タイ人教師の研究はこの時期で目立っている。そして、研究方法の妥当性に対する考察も行われた。研究方法では、量的調査は五本、質的調査は六本である。量的調査は前の時期より増加している傾向が見られた。

二・一・三 二〇一一年～二〇一七年における研究

二〇一一年～二〇一七年(急速増加期)では、表一に示しているように、論文数は前より著しく増加していて、

特に二〇一三年以後の論文数が多くなってきた。この時期で、量的調査を使った論文は長坂水晶他(二〇一一)、西野藍他(二〇一一)、星摩美(二〇一四)、福永達士(二〇一五)、久保田(二〇一七)である。また、布施悠子(二〇一五)では、質的調査と量的調査を合わせて実施した。阿部新(二〇一四)では、先行研究のメタ分析を行った。残りの一八本は質的調査を用いた。

この時期の量的調査においては、主な調査対象は前と同じようにNNTで、タイ人教師、韓国人教師及び中国人教師である。具体的な調査方法は前の二段階にある量的調査の時に使われた方法と大体同じであり、質的調査を使用し、その上でさらに統計分析も行なった。そのうち、西野他(同)は教育政策が日本語教師のビリーフに与える影響を調べるため、質問紙調査を行ない、また、九〇人の対象者から経験年数や年齢により任意抽出した職員六名に聞き取り調査も行なった。久保田(同)は教師のビリーフが一〇年において異なるのか、学習経験は一〇年において異なるのか、ビリーフと学習経験の関係性は一〇年において異なるかという三つの目的を持って考察している。使用した質問紙は久保田による改訂版されたBAJI調査票で、対象はNNT三八六名である。

一方、第三段階では、日本語教師のビリーフへの質的研究は主である。具体的な調査方法は、PAC分析、MGTA⁽⁶⁾、半構造化インタビュー、ナラティブ・アプローチ、ケーススタディがあり、それ以外には、マルチメソッドがある。

PAC分析を主な研究方法として使用した論文は片桐準二他(二〇一一)、八田直美他(二〇一二、二〇一七)、小澤他(二〇一二)、嶽肩他(二〇一二)、古別府(二〇一三)、坪根由香里他(二〇一三、二〇一四、二〇一五、二〇一六)、山田智久(二〇一四)、布施(二〇一五)の合計一二本がある。研

究目的は、教師観、授業観及びビリーフの変化である。研究対象は片桐他（同）、八田他（同）、小澤他（同）、嶽肩志江他（同）、古別府（同）では、タイ人の日本語教師を対象にして考察している。坪根他の三本及び八田他（同）は中国人日本語教師のビリーフに対する考察である。山田（同）は日本人の日本語教師を対象にして調査した。布施（同）では母語話者日本語教師が新しい教材を使うときに不安について、日本人教師五名を対象にPAC分析及び質問紙を使用して考察した。これらの研究では、研究対象数は一〇名以内で、対象者数が一名のみの研究もある。

M-GTA（改訂版グラデッド・セオリー・アプローチ）という分析方法は相互作用による人間行動及び意識・認識の変化のプロセスを理論化する場合に適している。この方法を使用した研究は、片桐他（同）、星（同）である。片桐他（同）では、タイ人大学教師七名を対象に、日本語教育現場の実態を分析し、彼らが「成長する教師」となる可能性を探るため、半構造化インタビュー^⑦を実施し、そしてM-GTAを使用して分析している。星（同）では、韓国人教師一二名を対象に、教師ビリーフのあり方を考察するため、M-GTAを使用した。

ナラティブ・アプローチを使用したのは牛窪隆太（二〇一三）である。この研究では、教育機関への参加とビリーフの関係を明らかにするため、新人教師一名を対象にして、ナラティブ・アプローチを使用した。一方、半構造化インタビューは質的調査でよく使われるが、他の調査法と併用するのは普通である。葛茜（二〇一四）では半構造化インタビューを使用して、中国の大学で働いている中国人教師九名、日本人教師六名を対象に、言語教育観と言語政策について考察している。

ケーススタディ^⑧を使用した論文は大河内瞳（二〇一五）である。この研究では、Professional learning community（PLC）で何をどのように学ぶか、その学びはPLCにどのようにサポートされるのかについて、

記述ケーススタディを使用して分析している。一方、小澤他（二〇一三）は授業観察時のコメントと感想レポート及びPAC分析など複数の研究方法を合わせて、一名の日本人教師の考え及びその裏にあるビリーフを考察している。このようなマルチメソッドは一つの研究方法で深く調査できないところを最小限にして、できるだけ研究対象を多くの側面から探求できるようになった。

急速発展期では、日本語教師のビリーフ研究における主な目的は前の二段階と同じように、ビリーフの内容、変容及び異なる対象間の比較であるが、質的調査法の種類が多くなってきたため、ビリーフに与える個人的な影響だけでなく、社会的な影響も視野に入れられた。また研究対象としては、タイ人、中国人及び韓国人に対する調査が多いことがわかった。一方、研究方法において、二〇一二年に発表された論文はPAC分析が多用され、それ以後、文化人類学の質的調査法（MM-GTA、ナラティブなど）を使用した論文が増えてきた。この時期では、質的調査法の使用がかなり多く、逆に、量的調査法による論文数はあまり変わらない。

以上、二〇〇一年～二〇一七年までに日本で投稿された日本語教師のビリーフ研究の主なものを概観した。

二・二 中国における研究

中国で投稿した論文に関して、筆者は複数の有名な刊行物を検索した結果、八本を得ることができ、それらを表二にまとめた。日本語教師のビリーフについて、中国での主な研究目的は日本語教師の研究動機、良い教師像、協働学習に対する認識などがある。研究対象は李曉博（二〇〇八）以外、全ては中国の大学で働く中国人日本語教師である。質的調査を用いた場合、研究対象の人数は三人位である。研究方法としては、質

表二 日本語教師を対象とするビリーフ研究 (中国)

李曉博 (2008) 『外語研究』 109、pp.46-50
尹松 (2011a) 『外語教學理論与实践』 4 pp58-64
尹松 (2011b) 『日語學習与研究』 157、pp82-88
楊雅林 (2013) 『当代教師教育』 6-4 pp48-56
穆紅・劉娜 (2015) 『中国校外教育 下旬刊』 p18
趙冬茜 (2016) 『天津外国語大學學報』 23-2 pp46-50
張麗梅 (2017) 『日語學習与研究』 191、pp47-56
金玉花 (2017) 『日語學習与研究』 190、pp79-86

究対象としては李(同)においては日本人の日本語教師R氏一名を対象にビリーフ調査を行なったが、これは留学時代の李の調査であり、中国で行った調査ではない。それ以外は全て中国人日本語教師が対象とされて、しかも、大学で働く教師が主な研究対象であり、中等教育機関での日本語教師を対象とする論文は探索できなかった。この点に関連して、日本で発表された教師ビリーフ研究の中に、タイの中等教育機関の教師のビリーフ研究が比較的多く見られた。

以上、日本語教師のビリーフ研究について、二〇〇一年から二〇一七年までの日本における研究と中国にお

的調査を用いた論文は、李(同)、尹松(二〇一一a、二〇一一b)、楊雅林(二〇一三)、穆紅・劉娜(二〇一五)で、金玉花(二〇一七)六本ある。具体的な研究方法としては、ナラティブ・アプローチを用いた李(同)と自由記述調査を用いた穆他(二〇一五)以外の研究はPAC分析を使用した。量的調査は趙冬茜(二〇一六)、張麗梅(二〇一七)で、二本ある。具体的な研究方法は、この二本とも質問紙を使用した。また趙(同)では因子分析を行なった。中国における日本語教師のビリーフに関する論文は日本のそれよりも少なく、また、調査方法は、種類は少ないが、質的調査のPAC分析がよく使われることがわかった。研

ける研究の概要を整理した。そのうち、日本における研究を三つの時期に分けて、研究目的、対象及び方法をまとめ、その特徴も検討してみた。一方、中国における研究は八本あり、そのまま分類せずに整理した。以下は中国人の日本語教師ビリーフ研究のみに注目し、その中の課題を深く検討していく。

三・ 中国人日本語教師を対象とする先行研究における課題点

三・一 日本側の中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究

日本における中国人日本語教師を対象とする研究は、岡崎（二〇〇二）、冷（二〇〇五）、岡本（二〇一〇）、長坂他（二〇一一）、坪根他（二〇一四、二〇一五、二〇一六）、葛（二〇一四）、八田他（二〇一七）がある。それ以外には、久保田（二〇〇六、二〇一七）、阿部（二〇一四）における調査では、中国人日本語教師だけでなく、世界中各国からの教師も含んでいる、そのため、世界各地の日本語教師のビリーフの傾向を一部把握できるが、中国人教師を対象とするビリーフを特定できないため、ここで久保田二本及び阿部（同）を分析対象外にする。岡崎（同）では、BALI質問紙と五件法を合わせて、中国の大学での中国人教師のビリーフを調査した。しかし、調査された対象者は全て中国における有名な大学で働く教師であるため、「中国人学習者に対する期待度」の結果が偏っているかと思われる。その点について、岡崎（同）でも述べられている。今後は、成績下位の学生が集まる地方公立大学、またはさらに下位学生が入学する私立大学の場合に、「中国人学習者に対する期待度」という項目に対する教師の考え方についても調査すべきだと思われる。また、同書では、「話

す機会がないなら外国語の学習は無意味だ」という項目に対し、中国人教師が「なんとも言えない」と回答している比率が高かったが、それについての解釈はされていない。質問紙調査自身の限度のため、被調査者が最も答えたがった内容は五件法の選択肢に表現できなく、深く調査できなかったと思われる。冷(同)では、「総合日本語」という授業に対する教師と学生の意識を調査し、六ヶ所の大学における日本語科の学生と教師の意識の傾向がわかった。調査された教師の人数は二九人、学生数は二一四人であった。対象者間の差がありすぎ、調査地域もわからなくて、これは調査結果に影響を与えるかと思われる。また、質問紙の調査結果については平均値を計算したが、さらに対象者間の相関関係を分析し、学生と教師の意識には関係があるのかをこれから検討すべきだと思われる。これは教師のピリーフ研究が始まったばかりの時に研究方法などが整っていなかったためであろう。

岡本(二〇一〇)では、Exploratory Practice(探求的実践、EP)^⑨を用いて、TT授業を全体的に把握した上で、研究協力者の語り、学習者へのインタビュー及び筆者の内省を分析することにより、NT、NNTに対する中国人教師のピリーフを明らかにした。そしてTT授業を通して、筆者の学びについて述べている。この研究を通して、新疆ウイグル自治区の大学での日本語授業における問題点が観察できた。しかし、この調査の視点は一つの大学の日本語授業に限られ、現地の文化と外国語教育政策についての検討は少なく、また、教師ピリーフへのインタビュー内容についての記述は多すぎて理論的な説明はまだ不十分と感じられる。長坂他(二〇一二)ではパイロット調査を行った後、質問紙を作成し、八五名の中国人教師を対象として、調査した。主な調査内容は会話授業の教室活動及び困難点であり、調査項目から見ると、ほとんど教授方法に関するもので、教師の意識面への調査は深くなされていない。

坪根他（二〇一四、二〇一五、二〇一六）では、同じようにPAC分析を使用し、中国人日本語教師の持つ「学習者に対するビリーフ」、「ビリーフの特徴」、「授業意識」及びその背景を調査している。また、対象者の年齢、学習歴が示されており、ビリーフ形成の要因の一部として分析された。しかし、筆者は少し問題であると感じる点は、それぞれの研究目的はが違っているが、使用した「刺激文」全て同じ、「いい中国人日本語教師」というものである。各自の目的に適合したにもかかわらず、異なる「刺激文」を使う方が妥当性がより保証されるであろう。また、出身地、職場の所在地などのような社会的な情報は載っていない。このような情報は、対象者のビリーフの形成に一定の影響を与えているため、ビリーフを調査するとき、必要不可欠だと思われる。

葛（二〇一四）では半構造化インタビューを実施し、中国人と日本人の教師の言語教育意識を考察している。教師の認識は、学習者、学習環境及び現場の問題点をめぐり、まとめられている。教師のプロフィールには教師の学生時代の専門が載っており、中国人教師の場合は哲学の人は一名、経済学出身の教師は一名で、他の教師の専門は言語学と教育学である。教授法または言語学などに詳しくない哲学と経済学出身の先生たちへのインタビューの内容をさらに綿密に分析した方が良いと思われる。また、言語教育に対する意識を考察するとき、先生の専門が異なると、その意識が違ってくる可能性もあろう。さらに、対象者となる中国人教師の九人の中で、新人教師が多いが、言語教育に関して、新人教師と経験教師との意識の差異があるかどうかについての分析は見られなかった。八田他（二〇一七）では、PAC分析を使用し、日本・日本文化について、新人教師と経験教師のビリーフを調査している。「刺激文」としては、坪根他（同上）の「刺激文」と同じものである。インタビューから日本・日本文化に関するものを抽出して分析したが、「刺激文」のテーマが広すぎたため、日本・日本文化についての内容が十分に聞き取れるとは言い難い。この研究を通し、日本での留学経験が日本・日本文化への

ビリーフに影響を与えたことがわかったが、日本滞在期間の長さもビリーフを揺さぶるかもしれない。これについて深く検討していくべきだと思われる。この点は八田他（同上）でも指摘している。

以上の日本における中国人日本語教師のビリーフ研究を通し、質的調査が行われた研究が多く、中国人日本語教師を対象とする研究は二〇一一年以降に集中しているが、全体から見ると、必ずしも多くはない。また、質的調査の一つの手段としてのPAC分析が教師のビリーフに多用されることが見られたが、PAC分析の欠点を最小化するための補足調査が行われた研究は少なかった。以下は中国における中国人日本語教師のビリーフ研究の問題点を分析していく。

三・二 中国側の中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究

中国において、尹（二〇一一a、二〇〇b）、楊（二〇一三）、穆他（二〇一五）、趙（二〇一六）、張（二〇一七）、金（二〇一七）は中国人日本語教師のビリーフ研究で、七本ある。尹（同）では、同じ刺激文を用いて上海にいる中国人教師各三名にPAC分析を行なった。刺激文は「大学教師として、研究はあなたにとって何を意味するのか、いつ研究を行ないたいのか、いつ研究を行ないたくないのか」（筆者訳）である。この刺激文から見ると、日本語教師のビリーフを特定できなく、大学の教師であれば、誰でも答えられるものなので、調査結果は一般の大学教師にも適用できると思われる。楊（同）では、中国人新人教師三名（在職の地域不明）にPAC分析を行った。刺激文は「優秀な大学日本語教師はどのような専門素質を持つべきか、どのような大学日本語教師は優秀なのか」（筆者訳）である。この研究の調査対象の所属の大学が理工系大学、外国語系大学及び師

範系大学であるという情報が示されている。調査結果から見ると、属性が異なる大学で働く日本語教師のピリーフに差異があるかどうかについては触れていなかった。これは調査方法と関係があると思われる。楊(同)で使用された方法はPAC分析である。一方、金(同)では、PAC分析を使用し、中国人日本語教師(経験教師三名)を対象に、「協働学習に関する教育観」について、PAC分析を行なった。被調査者が担当している授業は異なっている、これは個人の教育観にどのくらい影響しているか、被調査者の間に差異が存在するかについて詳しく分析されていない。また、PAC分析は少人数の被調査者の意識を深く調査し、統計ソフトにより客観的に解釈でき、速く結果が出ることができるとなどの利点があるが、被調査者がいる社会文化、所属の大学の政策または所在国の政策等からの影響を長期間の調査、分析するのは必要だと思われる。PAC分析が長期間の調査でないため、色々な要素を考え、全面的に人間のピリーフを把握できるとは言えないだろう。また、異なるソフトにより得られたデントログラフが違うということはすでに小澤他(二〇〇九)で指摘している、尹(同)、楊(同)、金(同)で異なる統計ソフトを使う場合、調査結果にどれほど影響を与えるかについて再び考慮すべきだと思われる。

一方、穆他(同)では、現場で働いている日本語教師三二名を対象として、「協働学習に対する意識」について自由記述を実施した。調査対象の背景はかなり違っているが、こういう違いによる影響の有無は調査に反映されていない。張(同)では中国国内の中国人教師を対象として、教学、研究と能力意識を中心にして、質問紙調査を行った。調査地域は広く、北京、上海のような大都市だけでなく、東北部、内陸部及び西南部における大学も含まれている。使用した質問紙は、パイロット調査を実施した上で作成したものである。しかし、地域ごとの回答数は明示されていない。また、調査データは各項目の回答平均値だけ計算されたが、各項目間の

関連性、異なる地域による回答にどのような差異があるのか、互いに関連性があるのかは統計的に分析されていない。

三・二 課題のまとめ

中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究への分析から見ると、以下の課題をまとめることができる。

調査方法においては、量的調査が少ないのに対し、質的調査法が多かった。二つの方法を合わせて調査した研究はあまりなかった。質的調査では、PAC分析が多用されているが、PAC分析を使用した理由もあまり明示されておらず、他の質的調査法を使用した論文も少なかった。PAC分析の限界を意識しながら、他の調査法と併用する、または他の質的調査法を試し、ビリーフ研究をより豊かなものにすべきであると考えられる。そして、これまで、中国人教師のビリーフ研究はほとんど横断研究で、縦断研究はかなり少ないということも指摘できる。

調査対象から見れば、中国の大都市、有名な大学に集中し、中国の内陸部、普通の大学または日本語教育が進んでいない地域にいる教師を対象とする調査は今のところ見られない。中国の大都市、有名な大学に集中すると、ビリーフの調査結果に偏りがあり、実際の状況が反映できなくなるかもしれない。調査対象のフェイスイーについて、国籍、性別、年齢、学歴、留学経験が載っているが、調査対象の学生時代の専門が何なのか、現在どのような授業を担当しているのか、どのような課題に取り込んでいるか、どこかの地域のどの大学で働くのかなどはビリーフの形成、内容及び変化を分析するときに不可欠なものであるが、それについては、詳しく記さ

れていない。また、調査対象数は複数の場合が多い、一名の対象者のみに対し、対象者の周りの環境を視野に入れ、対象者の生活に踏み込み、深く調査し続ける研究は珍しい。

一方、分析方法から見れば、調査方法の影響を受け、中国人日本語教師のビリーフへの分析は、調査対象に対するインタビュー、質問紙調査により得られた結果への分析にとどまり、調査対象に影響を与えた周辺の人々、事象等と合わせて分析されたのは稀である。これらの要因を調査の視野に入れると、研究成果の広がりが出る可能性がある。一方、中国側の研究は、調査結果が出た後で、ビリーフの形成要因に関する分析は不十分で、なぜこういうビリーフを持っているか、なぜ変わるのかなどの課題が残っている。

それ以外に、ビリーフ調査の地域特徴があまりないことが指摘できる。異なる地域で育てられた人は当地の慣習、政策などの色々な影響を受けて、物事に対する認識が必ずしも一致していないので、日本語、日本語教師に対する認識にも地域特徴が見られるはずであるが、これに対する分析は注目されていないようである。例えば、なぜ日本語教師という仕事を選んだのか、自分の学生時代と現在との繋がりなどについての分析調査は今まで見られていない。中国内陸部の日本語教師と沿海部の教師のビリーフに差異があるのかについても課題として残っている。つまり、中国人教師自身の生き方、社会的文脈との関わりも考慮した上でビリーフを検討すべきであり、このことは今後の課題として我々も考えていくべきであろう。

四．中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究成果の総括

日本側の研究から見ると、中国人教師のビリーフとの比較、言語教育観、またはいい日本語教師像に関する

網羅的な視点に注目している。中国人教師のビリーフと日本人教師のビリーフとの比較を通し、両者の違いを明らかにした研究が多い。具体的にいうと、岡崎（同）では、日本語学習の難しさに対する認識、中国人学習者の言語学習能力、及び「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」という四技能の難易度への判定に差異が見られた。また、葛（同）では、『正しい日本語』を追求する」という言語教育観に対し、日本人教師は専門性の高い授業を担任すべきであり、中国人教師は母語話者に近い言語能力を持つのが専門性の一つであるという認識が深いとわかった。一方、葛（同）は中国の教育大綱への分析を通し、「訓練で獲得できる学習者個体の日本語能力」という教育観に言語政策が与えた影響は大きいことを示している。つまり、教師のビリーフを分析するときには、教師の立場、当地の言語教育政策に対する配慮の重要性を説いている。

中国人新人教師と経験教師とのビリーフ研究【坪根他（二〇一四、二〇一五）】においては、すべて少人数を対象とした調査である。同じ新人教師でも、各自の受けた教育背景の異なりにより、「いい日本語教師」に対するビリーフの差異が見られた。例えば、教育政策の理念は必ずしも新人教師のビリーフにすべて反映されていない。一方、「学習者に対してどのような態度・行動をとるか、どのような意識を持つか」について、経験教師は学生を励ます等行為を通し、学生に動機づけること、学生へ思いやりを持つことというビリーフを持っているということがわかった。しかし、坪根他（二〇一四）では、中国人経験教師は「学習者と授業外でのつきあいも含めて関係作りをして信頼関係を築くというビリーフ」を持っていないと述べている。この点については、筆者の経験や観察から見て、多少疑問の余地がある。

また、中国人新人教師と経験教師のビリーフの比較研究では、坪根他（二〇一六）によると、「実践的な日本語」への意識について、新人教師は日本語のコミュニケーション能力を重視している意識を持っているという。

経験教師は学生のこれからの進路を意識し、日本語のプロになること、日本語で仕事ができることを目標とし、実例を考えながら教えるという意識を持っているという。「考えさせる授業」については、双方とも考えさせる授業を目指しているが、具体的に何を考えるかについての意識が異なると述べている。新人教師は、学習の中のことだけでなく、社会生活のことなど幅広く学習者に考えさせるのに対し、経験教師は学習の中のことを学習者に考えさせる意識を持っているという。両者のビリーフの違いの生じる要因は、各自の学習背景と関係していると述べている。八田他(二〇一七)では、「日本や日本文化」について、新人教師と経験教師のビリーフの差異が示している。「日本や日本文化」を取り上げる意義や必要性について、新人教師は広い視野を持ち、「知識や情報レベルを超えた文化観の広がりへの兆し」が感じられると述べている。従って、日本語教師の教歴、留学期間の長さ、国際情勢などの背景をビリーフの分析に入れるということを示唆している。

それ以外に冷(同)、長坂他(同)では、授業中の問題点をめぐり、中国人日本語教師の意識を調査した。冷(同)において、授業に対する全体的な意識については学生と教師の間には大きな差異が見られなかった、教科書への評価は、教師より学生の方が厳しい評価をしていると述べている。学生側は新しい教科書が欲しいという意識が強く現れた。長坂他(同)では、中国人教師に対し、日本人の発想、敬語や語彙などの言語項目、学習者への動機付けや授業の仕方などが会話指導の難点であると指摘している。また、岡本(同)では、「チーム・ティーチング」授業を使用し、研究協力者の語り、学習者へのインタビュー及び筆者の内省を分析することにより、NT教師に盲目的に頼り、自信がないという中国人教師のビリーフを明らかにした。これらの研究を通して、中国の日本語授業における問題点、一部中国人日本語教師のビリーフが明らかになった。今後は、教師教育を通じた意識改革や、教師同士が対等な立場で学び合う授業研究や話し合いなどの場の必要性が議論されるであ

ろう。

中国側の主な研究は教師の研究意識、協働学習への意識及び日本語教師の現状分析である。教師の研究意識に関して、尹（同）では、研究の動機付け、研究を行う途中で出会った問題、教育と研究との繋がりについて、上海の中国人日本語教師が持つ意識を明らかにしている。また、協働学習への意識について、協働学習の実施現状及び教師の態度を明らかにしている。協働学習は多くの中国人日本語教師に対し、新しい教授方法であるため、この方法に慣れていない教師が多く、協働学習の意味を完全に理解している人も少ないという結果がわかった。また、中国人日本語教師の全体的な意識と現状⁽¹⁰⁾への調査を通し、大学のレベル別の状況を一定的に把握している。ここで、レベルが最も低いCレベル大学を例として説明すると、Cレベル大学は研究より教学の方をより重視し、また、日本語教育で最も重要な能力として効果的な教授法の実現を謳っている。一方、Cレベル大学の教師にとって最も弱い能力が効果的な教授法ができないことである。このように多くの大学にいる日本語教師の意識の傾向が次第にわかってきた。

日本側と中国側の研究から見ると、授業中の問題点、教授法への認識、教育内容への考え、求められる日本語教師の能力などの点への調査を通し、中国人日本語教師のビリーフが大体把握できる。しかし、調査対象、調査方法及び分析方法は限られていると考えられる。したがって、以下は先行研究における問題点に沿いながら、中国人日本語教師のビリーフ研究について、今後の動向を分析し、展望を行う。

五．今後の展望

前述のように、日本語教師を対象とするビリーフ研究は一九九〇年代以来、次第に注目されてきた。学習活動の中心に位置している学習者に向けて、より良い学習環境を作るために、日本語教育において、重要な一環としての日本語教師の意識を把握しなければならない。日本語教育に対する教師の意識への把握を通し、教師への評価、教育能力の向上、日本語教育の現状への分析、今後の動きへの展望などに活用できると思われる。ここで、調査方法、調査対象、分析方法などをめぐって、今後の展望を行なって、そして、日本語教師を対象とするビリーフ研究が日本語教育にどのように役立つのかを検討してみる。

まず、調査方法に関しては、まず今まで先行研究から見ると、長期間で調査対象を観察する縦断研究は稀である。本来、ビリーフは時間の経つにつれて変容するという性格を持っているので、縦断研究を実施すれば、できるだけ多くのデータを収集し、ビリーフの変容及びその要因を正確に深く調査できるようになり、今後、少人数の中国人日本語教師のビリーフを長期間続いて観察していくのが望まれる。一方、中国人日本語教師のビリーフ研究では、質的調査法の使用が多いが、量的調査法の使用が相対的に少ない。これについて、二つの調査方法を併用した研究論文はあまりない。まず全体的な傾向を把握するため、量的調査法を使い、その後、焦点を絞って、一〇人位の対象に対し、質的調査法を使用するのが良いのではないかと考えている。こうすると、研究結果の客観性を保証でき、質的調査法の使用を通し、特定できない意識が明らかになり、量的調査の結果と相互に検証できると思われる。また、質的調査法の一つとしてのPAC分析は中国人日本語教師のビリーフ研究でよく使われている。PAC分析のメリットは短時間内で調査結果が見られ、客観的に調査できるというのであるが、統計ソフトの結果により、人間のビリーフを解釈することの妥当性は疑問の余地がある。文化人類学の質的調査法としてのM-GTA、エスノグラフィーなどの研究方法を用い、周りの環境に配慮し、細かい

ところまで注意を払い、収集されたデータに忠実にビリーフ調査を行うことがより適切ではないだろうか。本来、ビリーフの研究はその対象にいる社会の文脈と切り離せないため、エスノグラフィーの手法を取り入れたフィールド調査も今後、検討されるべきであろう。

次に、調査対象では、中国内陸部にいる中国人日本語教師を対象とした研究はあまりない。理由としては、内陸部の日本語教育は沿海部より遅れているため、注目されにくい。また、内陸部は海外との接触は頻繁ではなく、外国語を学んでも、使える場面が限られている。そのため、日本語専門を設置している大学が少なく、日本語教師の研修も少ない。それに日本語学習者数、教師数も少なくなっており、学習者、教師のビリーフを調査するのはやや困難になると思われる。そして、中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究はまだ成熟しているとは言えない。これまでの研究は、上海、大連などの日本語教育が盛んになっている大都市に集中しているが、中国における日本語教育現状を深く調査し、全国の状況を最大限に明らかにするために、今後のビリーフ研究は日本語教育がそれほど進んでいない中国の内陸部にも広がっていくべきだと思われる。また、全面的に客観的に中国における日本語教育現状を反映するため、優秀な大学だけでなく、レベルがやや低い大学または中等教育機関、民間の日本語教育機関にも注目すべきだと考えている。

また、日本語教師のみのデータを収集するのは十分ではなく、調査対象を多面的に分析するため、周辺にいる両親、友達、同僚、学校の責任者、学生などのデータも含めるべきだと思われる。日本語学習者からのデータは直接的に、日本語教師の教育能力、授業状況などを反映できるだけでなく、教師のビリーフが教師と学習者との接触にどのくらい実現されるかを検証できる。したがって、日本語授業活動に直接参加する学習者からのデータは日本語教師を対象とするビリーフ研究の中で、必要不可欠なものであると思われる。学校の政

策、責任者及び同僚たちが教師のビリーフに多少影響を与えることもある。学校の政策は教師の考え方とすれ違った場合、教師は実際に行動する時、教師の選択はどうなるのか、時間が経つに連れて、政策の影響を受けた教師のビリーフはどのくらい変化するのかなどは教師のビリーフを検討する時、視野に入れるといいと思われる。また、教師と毎日生活している家族も調査対象の範囲に入れても良いと思う。生活面が教師のビリーフに与える影響や、意識から行動（授業、研究）への移転というプロセスの中に支障を来すかなどの点についても、教師のビリーフの形成、変容を分析する時、役に立つと思われる。生活面の影響については尹松（同上）で少し触れているが、データの収集も不足しており、詳しく分析もされていなかった。今後調査対象者については、日本語教師だけでなく、視野を広げて、周りにいる人々にも注目していきたい。

一方、これまでの研究における収集したデータでは、日本語教師の学生時代の専攻についての記述は見られなかった。今中国の大学は自身のレベルアップのため、博士号を持った人を積極的に募集している。そのため、一部日本語教師の学生時代の専攻は日本語・日本語教育と全く関係ない場合が多くあり、彼達がなぜ日本語教師になりたいのか、日本語教師になった後、どうなるのかなどについて、中国人日本語教師のビリーフ研究の重要な一環として今後注目すべきであると思われる。そして、教師の所在大学の類別、所在地域などを記述したものは少ない。これらのデータは、教師のビリーフを分析する時に重要な情報であり、情報が足りないといビリーフの形成または変容の要因などを深く検討できなくて、一方、データを分析するとき、調査方法及び限られたデータの制限を受け、ビリーフの形成、変容などを全面的に深く分析するのは難しくなっていると思われる。これから、日本語教師のプロフィールなどのデータの収集についてさらに全面的に、細かい部分も含めて収集すべきだと思っている。

収集したデータを分析する時にもいくつか注意すべきところがある。人間の意識を分析する時、社会心理学の方法（PAC分析など）もあれば、文化人類学の方法（M-GTAなど）もある。それ以外に、統計処理により因子分析または相関関係を探求する方法もある。しかし、中国人日本語教師を対象とする研究で使われた方法はPAC分析が目立って多い。これから異なる方法を試して、さらに統計分析を行えば、新たな発見が出てくると期待している。

日本語教師を対象とするピリーフ研究は、これから日本語教育上で貢献できると思われる。求められる教師はどんな素質を持っているかなどという「日本語教師像」に対する調査は今後、教師評価に運用でき、教師養成にも役立つと考えられる。授業法に関するピリーフ調査は、今使っている教授法の問題点を見出し、ピリーフへの分析を通し、問題点の形成要因も検討できるようにする。また、新人教師への調査を通し、新人教師の不安がわかり、新人教師の研修をよりよく行える。それ以外に、教材の編纂、コースデザインなどに活用できるのが望ましい。

以上に基づき、中国人日本語教師を対象とするピリーフ研究の余地はまだ残っていると見られる。多種多様な調査方法を活用し、これまで注目されていない地域を対象とし、調査することは中国の日本語教育現状の解明の一助になると考えられる。

[註]

- (1) Horwitz (一九八七) は言語学習に対する学習者の確信を把握するため、BALI: Beliefs About Language Learning Inventoryを開発した。BALIは言語学習に対する適性、言語学習の難易度、言語学習の性質、コミュニケーション・ストラテジー、言語学習の動機、五領域にわたり、三四質問項目について「強く賛成」から「強く反対」までの5件法で回答する質問紙調査である。一九九〇年代以降、言語教育で活用され、研究課題または調査対象の異なりにより、新しい質問項目を追加し、調査を行なった研究は多く見られるが、近年、BALI調査を使用した調査はあまり見られなかった。(稲葉みどり二〇一四・一〇五頁による)
- (2) ナラティブ研究は質的研究のひとつで、初期には、自らの語りを用いて、抽象的な概念を説明しようとしたが、最近では、「解放と共感」(現実に対する代替案を生み出したり、他者を理解しようとするもの)という目的を強調したものもある。(灘光洋子・浅井亜紀子・小柳志津二〇一四・七二頁による)
- (3) PAC分析のPACはPersonal Attitude Construct (個人別態度構造)の略称である。この分析方は当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージ解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法である(内藤哲雄二〇一七・序による)
- (4) 心理学の分野で開発された分析方法で、ある事象に関する多数の量的データから、その事象に強い影響を与えている少数の因子をとり出す時に使用される多変量解析法のひとつという。(『流通用語辞典』)
- (5) 個人のライフについて口述の物語である。また個人ライフに焦点を合わせて自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つである。(桜井厚二〇一二『ライフストーリー論』六頁による)
- (6) M-GTAとは質的研究法として一九六〇年代に提案されたグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)の修正版である。データに接地し根差した理論を生成するための方法である。(灘光洋子・浅井亜紀子・小柳志津二〇一四・六八頁による)
- (7) 半構造化インタビューとは、あらかじめ質問項目を設定しておき、録音設備またメモを使いながら質問を続けて

行く方法である。

(8) ケーススタディーとは一つの社会的単位(個人・家族・集団・町など)を事例として取り上げ、その生活過程を社会的・文化的背景と関連させながら詳細に記述し、そこから一般法則を見いだしていく研究法。

(9) Exploratory Practiceでは、教室での様々な営みをもっと全体的に「life」として捉え、教室の「quality of life」を優先させながら、その理解を深めることを目的とする。クラスのある状況について、解決すべき問題を設定するのではなく、なぜそうなるのかという「puzzle」から出発し、教室の「quality of life」を理解していくことに重点が置かれるのである(岡本和恵二〇一〇:二〇九頁による)。

(10) 具体的にいうと、教学意識(学生観、学習観)、教学現状(教学行為、教学モード)、能力意識及び自己評価、研究現状と研究意識がある。(張麗梅二〇一七:四八頁による)

参考文献

日本語文献

- 安龍洙・渡辺文夫・内藤哲雄(二〇〇四)「日本語学習者と日本語教師の授業観の比較―個人別態度構造分析法(PAC)による事例研究―」『筑波大学留学生センター紀要』二 筑波大学留学生センター 四九―五九頁
- 秋田美帆(二〇一三)「教育観の意識下のプロセスとその要因実習生による振り返りをデータとして」『言語文化教育研究』一一 言語教育研究学会 一二―一四〇頁
- 阿部新(二〇一四)「世界各地の日本語学習者の文法学習・語彙学習についてのピリフ・ノンネイティブ日本語教師・日本人大学生・日本人教師と比較して」『国立国語研究所論集』八 国立国語研究所 一一―二三頁
- 飯野令子(二〇一〇)「日本語教師のライフストーリーを語る場における経験の意味生成 語り手と聞き手の相互作用の分析から」『言語文化教育研究』九 一七―四一頁
- 稲葉みどり(二〇一四)「外国語学習のピリフの考察―愛知教育大学の1年生の場合―」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』四 一四九―一五六頁
- 牛窪隆太(二〇一三)「新人日本語教師の教育機関への参加に関する考察ナラティブ・アプローチによる事例研究」

『言語文化教育研究』一一 二六九—二九〇頁

岡崎智己(二〇〇一)「母語話者と非母語話者教師の BELIEFS 比較—日本と中国の日本語教師の場合」『日本語教育』一一〇 日本語教育学会 一一〇—一一九頁

岡本和恵(二〇一〇)『ネイティブ教師・ノンネイティブ教師』の意識とその実践—ティーム・ティーチングを通して見えてきたもの—『阪大日本語研究』二二 大阪大学大学院文学研究科 二〇五—二三五頁

小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由香里(二〇〇五)「日本語教育における教師の実践的思考に関する研究(2)—新人・ベテラン教師の授業観察時のプロトコルと観察後のレポートの比較より—」『ICU日本語教育研究』二 国際基督教大学日本語教育研究センター 一一—二二頁

小澤伊久美・丸山千歌(二〇〇九)「PAC分析における好ましい統計処理とは—ソフトウェアによってデンドログラムが相違する問題への対処のために—」『ICU日本語教育研究』六 国際基督教大学日本語教育研究センター 二五—四七頁

小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由香里・八田直美(二〇一二)「PAC分析を日本語非母語話者に日本語で実施する際の留意点—タイ人新人日本語教師へのPAC分析から—」『ICU日本語教育研究』八 一九—三四頁

小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由香里(二〇一三)「ある日本語授業についての経験日本語教師Aの語りとその背景にある意識・マルチメソッドによる分析」『ICU日本語教育研究』一〇 国際基督教大学日本語教育研究センター 三二—四四頁

大河内瞳(二〇一五)「Professional learning communityにおける教師の学び:タイの大学で教える日本語教師のケース・スタディ」『阪大日本語研究』二七 大阪大学大学院文学研究科 一九五—二二二頁

片桐準二・Kanokwan Laohaburankit KATAGIRI・池谷清美・中山英治(二〇一二)「タイ高等教育の日本語教育協働現場における「成長する教師」の可能性—タイ人教師が経験する協働現場の実態分析からの考察—」『国際交流基金バンク日本文化センター日本語教育紀要』八 国際交流基金バンク日本文化センター 三五—四四頁

片桐準二・池谷清美・カノックワン・ラオハブラナキット・片桐(二〇一二)「海外での協働現場における日本人

教師の心理的文化変容―PAC分析による協働観の事例研究から― 一一八頁

葛茜 (二〇一四)「中国の大学日本語専攻教育における教師の言語教育観とその教育の再考―四大学の日本語教師への調査をもとに」『日本語・日本語研究』四 東京外国語大学国際日本研究センター 五三―七〇頁

久保田美子 (二〇〇六)「ノンネイティブ日本語教師のビリーフ―因子分析による『正確さ志向』と『豊かさ志向』―」『日本語教育』一三〇 日本語教育学会 九〇―九九頁

久保田美子 (二〇一七)「ノンネイティブ日本語教師のビリーフと学習経験―2004・2005年度と2014・2015年度の量的調査結果の比較―」『国際交流基金日本語教育紀要』一三 七―二三頁

呉禱受 (二〇〇六)「韓国における日本語教師のビリーフの特徴―日本人教師と韓国人教師のビリーフの比較を通して―」『ことばの科学』一九 名古屋大学言語文化研究会 五―二三頁

桜井厚 (二〇一七)『ライフストーリー論』弘文堂 六頁

嶽肩志江・坪根由香里・小澤伊久美 (二〇〇九)「教師の実践的思考を探る上でのビリーフ質問紙調査の可能性と課題―日本語教育における教師の実践的思考に関する研究(3)―」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』

一六 三七―五六頁

嶽肩志江・坪根由香里・小澤伊久美・八田直美 (二〇一七)「PAC分析と質問紙調査併用によるビリーフ研究―あるタイ人日本語教師の事例より―」横浜国立大学留学生センター 九三―一四六頁

ツイガルニツカヤ・レナ (二〇〇七)「日本語オノマトペに対するビリーフ―日本語教師と学習者の比較―」『筑波

応用言語学研究』一四 一二九―一三七頁

坪根由香里・嶽肩志江・小澤伊久美・八田直美 (二〇一五)「いい日本語教師」に関する中国人新人教師のビリーフ―PAC分析の結果から―」『大阪観光大学紀要』一五 三三―四二頁

坪根由香里・小澤伊久美・嶽肩志江・八田直美 (二〇一六)「実践的な日本語」考えさせる授業」を意識する中国語人日本語教師―その背景と彼らが目指す授業―」『大阪観光大学紀要』一六 大阪観光大学 三三―四二頁

坪根由香里・小澤伊久美・八田直美 (二〇一七)「韓国人経験日本語教師のビリーフを探る―いい日本語教師―に関するPAC分析の結果から―」『大阪観光大学紀要』一三 六七―七八頁

坪根由香里・小澤伊久美・嶽肩志江（二〇一四）「中国人経験日本語教師の『対学習者』ビリーフとその背景を探る―『いい日本語教師』に関するPAC分析の結果から―」『大阪観光大学紀要』一四 五九―六八頁

灘光洋子・浅井亜紀子・小柳志津（二〇一四）「質的研究方法について考える…グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ナラティブ分析、アクションリサーチを中心として」『異文化コミュニケーション論集』一二 六七―八四頁

中井雅也（二〇〇九）「タイの高校で求められる日本人日本語教師像―学生とタイ人教師の観点から―」『国際交流基金バンク日本文化センター日本語教育紀要』六 国際交流基金バンク日本文化センター 四六―五二頁

長坂水晶・木田真理（二〇一一）「中国の大学の日本語授業における会話指導に関する調査―中・上級レベルを対象とした教室活動の実態と教師の意識―」『国際交流基金日本語教育紀要』七 四三―五七頁

西野藍・太原ゆか・内田陽子（二〇一一）「タイの中等日本語教育とEducation Professional Standards―現場の教員の視点から見た意義と問題―」『国際交流基金バンク日本文化センター日本語教育紀要』八 一一五―一二四頁

八若壽美子・藤原智栄美（二〇一〇）「Non-native 日本語教師の対日イメージ―個人別態度構造分析法（PAC分析）による事例研究―」『茨城大学留学生センター紀要』八 一九―四二頁

八田直美・小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由香里（二〇一二）「ノンネイティブ新人日本語教師にとつての研修の意義―PAC分析によるタイ人新人日本語教師のビリーフ調査から―」『国際交流基金日本語教育紀要』八 国際交流基金日本語交際センター 二二―三九頁

八田直美・小澤伊久美・坪根由香里・嶽肩志江（二〇一七）「中国人日本語教師が持つ日本語教育における日本・日本文化に関する意識―新人教師と経験教師の比較より―」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』一五 三〇―四四頁

古別府ひづる（二〇〇八）「タイ中等教育機関におけるタイ人日本語教師の良い日本語教師観―PAC分析と半構造化面接より―」『国際交流基金バンク日本文化センター日本語教育紀要』五 三七―四六頁

古別府ひづる(二〇〇九)「タイ中等教育機関の日本語教師が求める日本語教師の行動特性―探索的因子分析より―」『日本教科教育学会誌』三二―一 日本教科教育学会 五九―七〇頁

古別府ひづる(二〇一三)「タイ高等教育機関におけるタイ人日本語教師の良き日本語教師観―PAC分析と半構造化面接より―」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』八 一二五―一二二頁

福永達士(二〇一五)「イ人日本語教師の教師認知―タイ中等教育機関におけるビリーフ調査から―」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』一二 国際交流基金バンコク日本文化センター 二七―三六頁

布施悠子(二〇一五)「母語話者日本語教師不安尺度の開発―新しい教材を教える場面に着目して―」『二橋大学国際教育センター紀要』六 一二三―一三六頁

星摩美(二〇一四)「日本語教師の持つビリーフの要因と変化に関する縦断的研究―質問紙調査結果に見る韓国中等教育における国家シラバス「教育課程」と日本語教師のビリーフ」『人間社会環境研究』二八 金沢大学大学院人間社会環境研究科 三三―五〇頁

星摩美(二〇一六)「韓国中等教育日本語教師の実践とビリーフ変化とその要因を中心に―」『日本語教育』一六五 八九―一〇三頁

松田真希子(二〇〇五)「現職日本語教師のビリーフに関する質的研究」『長岡技術科学大学言語・人文科学論集』

一九 長岡技術科学大学留学生センター 二二五―二四〇頁

内藤哲雄(二〇一七)『PAC分析実施法入門「改訂版」…「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版

山田智久(二〇一四)「教師のビリーフの変化要因についての考察―二名の日本語教師へのPAC分析調査結果の比較から―」『日本語教育』一五七 日本語教育学会 三二―四六頁

李曉博(二〇〇四)「日本語教師の専門知についてのナラティブ的理解」『阪大日本語研究』一六 八三―一一三頁

冷麗敏(二〇〇五)「中国の大学における『総合日本語(精読)』に関する意識調査―学習者と教師の回答を比較して―」『日本言語文化研究会論集』創刊号 五九―七三頁

中国語文献

- 李曉博 (二〇〇八)「教室里的權威：對日語教師個人實踐知識的敘事研究」『外語研究』一一九 四六一—五〇頁
- 尹松 (二〇一一 a)「大學日語教師科研動因的個人分析——基於對三位副教授的PAC分析結果」『外語教學理論與實踐』四 五八—六四頁
- 尹松 (二〇一一 b)「一項基於PAC分析的日語專業教師科研意識調查」『日語學習與研究』一 一五七 八二—八八頁
- 楊雅林 (二〇一三)「青年日語教師對優秀日語教師專業素質的認知——基於PAC分析的教師認知研究」『當代教師教育』六—四 四八—五六頁
- 穆紅·劉娜 (二〇一五)「中國日語教師對合作學習教學實踐的觀念與意識」『中國校外教育 下旬刊』一八頁
- 趙冬茜 (二〇一六)「中國日語教師關於合作學習模式的意識調查」『天津外國語大學學報』二三—二 四六一—五〇頁
- 張麗梅 (二〇一七)「中國高校日語專業教師發展現狀和發展需求研究——以教學、科研與能力意識為中心」『日語學習與研究』一九一 四七一—五六頁
- 金玉花 (二〇一七)「合作學習中大學日語教師的教學——基於三位大學日語教師的PAC分析」『日語學習與研究』一九〇 七九—八六頁